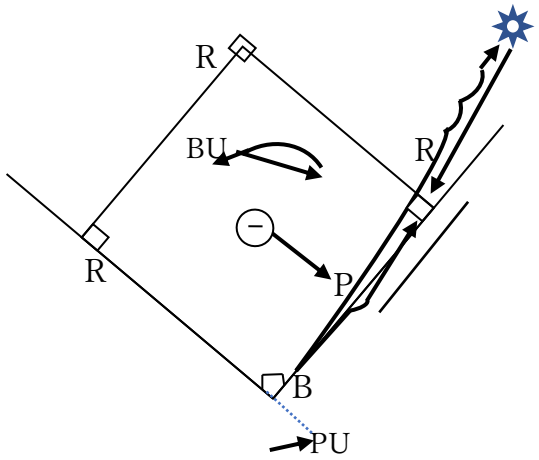
「暇人が読む二人制審判員の瓦版」No,16　2024/7 月号

このプレイはどちらの審判員のテリトリー？

2024/5/3

二人制の試合で、１アウト走者満塁、打者の打球がライト前に飛び、バウンドした打球を捕った右翼手が１塁へ送球するフォースプレイがあった。ショート前に位置していた塁審は、セカンド前に移動して１塁のフォースプレイのアウトをジャッジし、すぐにショート前に切り返した。３塁と２塁走者は本塁を駆け抜けたが、１塁でのフォースプレイの前に、３フットの入り口付近に投手が移動して来た為、ぶつかりそうになった打者走者が１塁ベンチ側に少し膨らむように走った。打者走者はフォースアウトになったが、攻撃側からは抗議はなかった。



しかし、オブストラクションをとるべきであったと試合後に控え審判から指摘があった。球審も塁審もオブストラクションに気付かなかったのである。

球審はこの間、ホームでのタッグプレイを予想し、３塁とホームの延長線上に位置していた。さて、オブストラクションはどちらの審判員がジャッジするべきだったのか。図を参考に確認しよう。フェア・ファウルの判定は必要なかったので、球審の仕事は、打者が１塁到達前までの走塁妨害と守備妨害を確認すること、走者の３塁触塁とホームのプレイを受け持つこと。塁審の仕事は、1～3 塁までのプレイを受け持つこと。

このとき、球審は本塁でのタッグプレイの準備のために、図の矢印の３・本間の延長線上に移動していたのである。プレイを決めつけてしまったようである。このケースでは、球審は１塁とホームの延長線上に位置して、打者が１塁到達前までの走塁妨害と守備妨害を確認しなければならない。よって、タイムをかけてオブストラクションのＡ項を適用することになる。よって、打者は１塁へ、そして、オブストラクションがなければ各走者はどこまで進むことができたのかを塁審と協議して進塁させる塁を指示する。

塁審は、オブストラクションがなければ、図の様に１塁のプレイを判定した後、切り返して２塁に進んだ走者を担当することになるが、オブストラクションのＡ項で球審がタイムをかければタイムをエコーして、各走者をどこまで進塁させるべきかを球審と協議する。今回のケースは球審にとって、非常に高度なテクニックが要求される仕事であるが、自信をもって試合をコントロールできるように復習しておこう。

YouTube を視聴していて

2024/5/9

YouTube で MLB : Scary Injuries (恐ろしい怪我)を視聴していて、右打者がバントをしようとしたところ、鋭い投球が打者の頭部に直接あたり、打者が倒れしばらく立ち上がることができなかった場面に出くわした。そのとき球審は、タイムをかけ、すぐに左手で１塁方向を指す動作をした後、攻撃側のダッグアウトにすぐ駆け付けるように指示をして、打者とスタッフたちの様子を観察していた。頭部に投球が当たった直後、球審は打者がスイングしたかどうかを１塁塁審に聞いていたのだ。このような状況でも冷静な対処ができるのは、普段からいろいろな状況をイメージしながら対応を考えているからだろう。

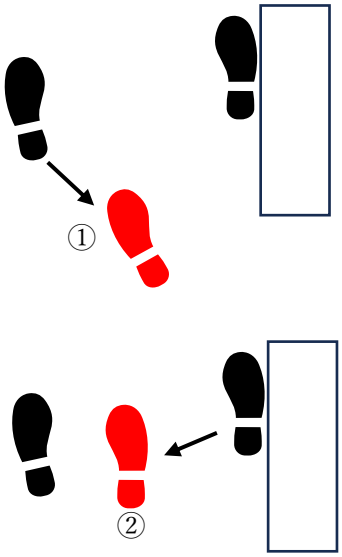
投手のグラブのなかに何があるのか？

2024/5/26

学童部の試合開始前の整列で、守備側の投手がグラブのなかに白いものを握っていた。「ボールかな？」と思ったが、試合前の整列時に投手がボールをグラブに入れているのも変だなと思い、よくよく見てみるとロジンバッグであった。早速、監督に投手のグラブのロジンをふき取るように要請をしてから、投手をマウンドに行かせた。ロジンをグラブやボールにつけることは許してはいけないので、よく覚えておこう。

１試合で３回のボーク

2024/6/1



中学２年生のクラブチームの試合で、３人目の投手が２アウト満塁で登場し、いきなりボークで１点を取られた。どのようなボークかというと右図の様に軸足を投手板に平行に置き、サインを確認すると図の①の位置に自由な足を引いて投球しようとしたのである。投手もベンチの監督も知らなかったようなので、どうしてボークなのか説明し、走者２・３塁で試合を再開したが、２球投球した後、また同じボークを犯してしまった。

３つ目のボークは、相手チームの投手が捕手のサインを見た後、軸足を右図の②の様に移動させてしまった。

１試合でボークが３回。とても珍しい試合であった。後日、①の足の移動（投球動作の変更）で２度もボークを取られたチームのスタッフから、今までボークを１度も取られたことがなかったと聞き、これまたびっくり！

四球の打者がボールを拾い上げた

2024/6/9

「先日の試合で走者なしの場面において、打者の四球目の投球を捕手がファンブルし、打者がボールを拾い上げてしまった」というのだ。相談者はタイムをかけてボールに触れないように言って、打者を１塁に行かせ試合を再開したのだが、それでよかったのかという問い合わせである。

そこで、上記の行為に関連しそうな項目を以下の様に調べてみた。

5.09a、5.09a15、5.09b3、5.09b13、6.07a7、6.01a インターフェアに対するペナルティ、6.01b

これらには該当するものが見当たらず、また、打者は一塁への進塁権を得ている。「ボールを拾い上げる」行為については、6.01e【原注】で妨害行為として明記されているが、守備側や攻撃側双方の利益や不利益になるような事はない為、審判員はタイムをかけ、打者を一塁に行かせて、走者一塁で試合を再開する処置をとれば良いと考える。

打者に対してはインプレイ中にボールを触らないように一言、言い置くことは必要であろう。当事者の審判員の対応はナイスジャッジである。

では、もし走者がいた状態で今回の様なことが起きたらどうしたらよいのだろうか？やはりタイムをかけて、打者を一塁に行かせ、それによって押し出された走者は次塁に行かせ、そうではない走者は投球当時の占有塁に戻して試合を再開させればよいと考える。

ただし、走者が盗塁を試み捕手がファンブルしたボールを捕って走者をアウトにしようとしていた時に四球を得た打者がボールを拾い上げてしまったために盗塁を許したと球審が判断すれば、打者走者をアウトにして走者を投球当時の塁に戻さなくてはならないだろう。6.01a【注】①

5.09a 打者アウト‥‥該当しない

5.09a15 走者を除く攻撃側の妨害 ‥該当しない

走者を除く攻撃側のチームのメンバーが、**打球を処理しようとしている野手の守備を妨害**した場合（6.01b 参照。走者による妨害については 5.09b3 参照）

5.09b3 ‥該当しない

走者が、**送球を故意に妨げた**場合、または**打球を処理しようとしている野手の妨げ**になった場合。

ペナルティ　走者はアウトとなり、ボールデッドとなる。［6.01a インターフェアに対するペナルティ］参照

5.09b13 走者を除く攻撃側の妨害‥該当しない

走者を除く攻撃側チームのメンバーが、ある走者に対して行われた**送球を処理しようとしている野手の守備を妨害した場合**。（6.01b 参照。走者により妨害については 5.09b3 参照）

6.01a7 打者が故意に併殺を妨げる ‥該当しない

打者走者が、**明らかに併殺を行わせまいとして故意に打球を妨げる**か、または**打球を処理している野手を妨害**したと審判員が判断したとき、審判員は打者走者に妨害によるアウトを宣告するとともに、どこで併殺が行われようとしていたかに関係なく、本塁に最も近い走者に対してもアウトを宣告する。この場合、ボールデッドとなって他の走者は進塁することはできない。

6.01a インターフェアに対するペナルティ

走者はアウトとなり、ボールデッドとなる‥今回のケースでは走者はいない。

‥‥打者走者が一塁に到達しないうちに妨害が発生したときは、すべての走者は投手の投球当時に占有していた塁に戻らなければならない。‥‥

6.01b 走者を除く攻撃側の妨害 ‥該当しない

攻撃側の権利優先

攻撃側チームのプレーヤー、ベースコーチまたはその他のメンバーは、**打球あるいは送球を処理しようとしている野手の守備を妨げ**ないように、必要に応じて自己の占めている場所（ダッグアウト内またはブルペンを含む）を譲らなければならない。

走者を除く攻撃側のチームのメンバーが、**打球を処理しようとしている野手の守備を妨害**した場合は、ボールデッドとなって、打者はアウトとなり、すべての走者は投球当時に占有していた塁に戻る。

走者を除く攻撃側のメンバーが、**送球を処理しようとしている野手の守備を妨害**した場合は、ボールデッドとなって、そのプレイの対象であった走者はアウトとなり、他の走者は妨害発生の瞬間に占有していた塁に戻る。

6.01e【原注】

‥‥**ボールを拾い上げたり**、捕ったり、意図的に触れたりすることや、押し戻したり、蹴ったりすれば、この行為は故意の妨害とみなされる。

新人やるなあ！

2024/6/9

今年度から審判員としてスタートを切った若手が、今日の球審の試合で１・２塁間での挟殺プレイでラインアウトを裁いたが、英語の正式コール「アウト　オブ　ザ　ベースパス。ヒーズ　アウト」と発声し堂々とジャッジしていたのには感心した。いざ本番の試合ですぐに発声できたのは、日ごろから何度もイメージトレーニングをしてきたのだろう。あっぱれ！

コリジョンルールでセーフ？

2024/6/16

新人の審判員が球審を務める試合で、投球を捕球した捕手が投手に山なりの送球を返した。そのとき３塁走者が本塁に突っ込んできたので、投手はあわてて本塁に送球した。球審はセーフのジャッジをした。試合終了後、バックネット裏で観ていた人から、あのプレイは「コリジョンルールでセーフだったのですか？」と聞かれ「走者の足が入っていました。」と答えたそうである。

では、コリジョンでセーフにする場合の球審のメカニックはどうすればよいのだろうか。「タイム」をかけ、「オブストラクション」を宣告すればよい。インプレイで「セーフ」とコールしたのであれば、コリジョンではないことがわかるはずである。

アメリカでは、「バスター・ポージールール」と呼んでいる。バスター・ポージーは2010年に新人王を獲得、後に首位打者も獲得し、ワールドシリーズを3度も制覇したサンフランシスコ・ジャイアンツの正捕手でもあり、MLBのスター選手であった。2011年に彼が本塁のクロスプレイで三塁走者からの激しいタックルで左足首の靭帯断裂という大怪我をし、このシーズンを棒に振ることになってしまった。YouTubeでこのときの映像を見ることができる。ポージーの大怪我を一つのきっかけにして、MLBでは2014年から本塁上でのクロスプレイ禁止をルールとして適用し、遅れて日本でも2016年から採用され、「コリジョンルール」6.01h(i)として野球ファンにもよく知られるルールとなった。

このジャッジ厳しいでしょうか？

2024/6/16

試合を終え、帰宅しようとしていたとき、友人から電話がかかってきた。友人の話では、中学生の試合で3アウトチェンジとなり、守備の選手がグランドに出てきた。その一人が投手板に置いてあるボールをもって投手板に足を置きサインを見る格好をふざけてやっているのを見た友人は、投手の交代となることを監督に告げると、「そんなルールがどこにあるんだ」と食いつかれたそうだ。規則書に明記されていることを告げ、最初の打者がアウトになるか塁に出るかしないと投手の交代ができない旨を説明し、結局、その内野手が投手となり先頭打者に四球を与え、再び元の投手に交代したのだが、四球で走者になった選手が得点したので余計に周りから白い目で見られ肩身の狭い思いをし、試合後に規則書に明記された文面をラインで送ったとのことであった。正しいことをやっているのに、監督も選手も観客も知らないルールだからといって、勉強不足を棚に上げ審判員を非難するのは最低である。毅然として正当性を訴え対処したこの審判員を称賛し、私たちも見習うべきである。

友人が適用したこのルールは、MLB では、１塁手が対象になって揉めたことから、このルールーが採用された経緯があるが、現在の規則書では、

「5.10(j)　交代発表のなかったプレーヤーの取り扱い」に記載されており、

「代わって出場したプレーヤーは、たとえその発表がなくても、次のときから、試合に出場したものとみなされる‥」ここには、投手、打者、野手、走者について銘記されているが、野手だけには「プレイが始まったとき」とうい条件が付いている。さて、どうしてだろうか？自分で考えてみよう。

珍しいプレイ

2024/6/17

珍プレイが起きましたとラインが送られてきた。「最終回１アウト満塁で２点を負けているチームの攻撃で、ライトフライを打った。何を考えたのか全ての走者がスタートを切ってしまい、3 塁走者がホームインした後、フライを捕球した右翼手は投手に送球した。投手は１塁走者の帰塁が遅いのを見て１塁に送球して３アウトとなり、得点１点が入り２対１でゲームセットになった」

では、3 アウトになった時点で、球審はどのようにしたら良いのだろうか？1 塁に送球されて第三アウトを塁審が宣告した時点で、「ザッツ・ラン・スコアー、ザッツ・ラン・スコアー、スコアー、ザッツ、ラン（1 点入りました)」と記録係に宣告しなければならない。その後、3 塁でアピールがあって、3 塁走者のアウトが認められたら、第四アウトを第三アウトに置き換えられるので「ノーラン・スコアー、ノーラン・スコアー（得点は入っていません)」と宣告しなおすことになる。

5.08a【注 1】

「第３アウトがフォースアウト以外のアウトで、そのプレイ中に他の走者が本塁に達した場合、審判員は、その走者にアピールプレイが残っているか否かに関係なく、本塁到達の方が第３アウトより早かったか否かを明示しなければならない。」

なぜ、上記の【注 1】のように、球審は「本塁到達の方が第３アウトより早かったか否かを明示しなければならない。」のか。得点が入ったことを明示しなければ守備側に第四アウトのアピールをしなくてもよいと受け取られかねないからである。

外野手がスライディングキャッチ

2024/6/22

１アウト走者２塁で、打者がライトの前方にフライを打ち上げた。右翼手は懸命に前進し頭から飛び込んで、地面に落ちるかと思われた打球をグラブに入れた。この打球判定のテリトリーは塁審である。塁審はショート前から１・２塁間に移動し、打球をブラブに入れたのを見て打球判定をした。しかし、この時点で打球判定をしてはいけない。打球がグラブのなかに入っても外野手の体が動いている状態のうちにキャッチのコールをすれば、転げ落ちる可能性が残っているからである。このような打球判定をする場合、塁審としては、1・2 塁間のベースラインまで素早く移動して外野手が捕球しようと前に飛び込もうとした時点で止まって観察し、体が動いている時点ではまだ判定してはいけない。外野手の動きが止まるまで待ってから、2・3 歩外野手に近づいてボールの確保を確認し、この時点で打球判定をコールするのである。前回の瓦版 15 号で、これと同様なプレイを掲載したが、記事をよく読んで審判員のメカニックを身につけてほしい。